

第10回 ベニバナ

東京理科大学

薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦

「^{べにばな}紅花」と書かれるように、ベニバナの花からは赤い色素である carthamin がとられる。かつては口紅として女性の口元を彩ったが、赤い染料をとるのは大変手間がかかり、天然の色素としてはとても高価であるので現在ではあまり用いられない。たねからとれるベニバナ油は食品として利用されているので、今ではこちらの方が身近であろう。ベニバナはキク科の植物で、1つの花のように見えるのは小花が集まっている頭状花である(写真1)。1つ1つの花は写真2のような管状の花をしている。

生薬としては花の部分を用い、「^{こうか}紅花」と読まれ、その効能は「^{つうけい}通経」作用であるといわれる。通経とは分かりづらい表現であるが、辞書などを引くと「月経を通じる」という意味だとされており、紅花は婦人薬と考えられている。しかしながら、漢方の古典籍を紐解くと通経を月経に関する意味にとらえるのはかなり狭い解釈であるといわざるをえない。そもそも通経の「^{けい}経」は、はり・灸の医学で使われる経脈の意である。

ツボが書かれた人体の図、または模型でツボ同士をつなぐように線が引かれているのを御覧になったことがあるだろうか。あの線は経脈を表している。経脈は臓腑や骨髄といった体の深い部位にある精気を末端の組織へと交流させる通路である。これが薬の理論に応用される時は、経脈は水や血といった具体的な体液の通路として考えられることが多い。したがって、通経とは経脈を薬に応用した理論を土台としたものであり、本来の意味は薬



写真1 左は花の断面 ^{そうぼう}総苞の中にたくさんの小花が集まっている。



写真2 ^{かんじょうか}ベニバナの管状花 管状になった合弁花である。

の働きによって、経脈をスムーズに通行させるということである。それゆえに、月経に関わる経脈以外にもさまざまな経脈を通経させる薬物ももちろん存在するわけである。その中であって、特に紅花は「血は心包(心臓をとり囲む膜)に生じ、肝に蔵される。また^{しんぼう}衝脈と任脈に属する。紅花はこれらの経脈に働く」と説明される。任脈とは腹部の中心を走る経脈のことで、衝脈とともに月経に深く関わる。

つまり、心(心包)と肝の経脈、および月経に影響する任衝脈の、それぞれの経脈の通行を促す、というのが紅花の通経の意味であると解される。そのため、紅花は生理不順や生理痛に用いられる^{つうどうさん}通導散をはじめ、月経以外にも^{しゅさび}酒皰鼻(鼻の周りの血管が拡張して酒に酔ったような赤ら顔になる状態)に用いる^{かっこん}葛根加紅花湯などに用いられている。

通経すなわち月経として理解し、月経血に効くからその他の循環血の問題にも効くだろうと、あえて想像力を働かせるのは漢方の薬物論としては正しい方法ではない。